

執筆者一覧

研究論文



明石 純一 **AKASHI, Junichi**

専門は移民研究・国際人口移動論，最近の調査対象地域は日本およびシンガポール。著作に、『入国管理政策』（ナカニシヤ出版），『移民政策のアプローチ』（明石書店，共著）ほか。博士（国際政治経済学）



今泉 容子 **IMA-IZUMI, Yoko**

専門は映画研究，文学／映画の学際的比較研究，ジェンダー研究。Ph.D.（米イェール大学，文学・芸術）。著書は『映画の文法』（絶版，Amazon.co.jpで15,000円），『日本シネマの女たち』，『スクリーンの英文学』，『修正される女』など



小野 正樹 **ONO, Masaki**

専門は日本語教育学，言語機能に関心を持ち，研究と教育に当たっている。著作に、『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』（明治書院，共著），『コロケーションで増やす表現 ほんきの日本語』（くろしお出版，共著），『日本語態度動詞述語文の情報構造』（ひつじ書房）ほか。博士（言語学）



加納千恵子 **KANO, Chieko**

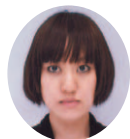
専門は日本語教育学，特に漢字教育方法の研究。主な著書に『Basic Kanji Book』vol.1&2（凡人社），『Intermediate Kanji Book』vol.1&2（凡人社），『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』（創訳社，共著）ほか。



関崎 博紀 **SEKIZAKI, Hironori**

専門：会話分析，日本語教育学。業績：『「BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語2」の作成過程と整備の結果から示されること—会話教育への示唆—』（共著）ほか。

研究ノート



内山 祭 **UCHIYAMA, Matsuri**

大学院生。博士論文執筆中。専門はマスメディア研究。著作に「報道番組における音響効果」(『比較文化研究 4号』), 「メディアの犯罪報道と大学生の治安・社会参与意識についての調査研究」(『地域研究 31号』) など。



柯 一薰 **KE, Yi-hsun**

大学院生。博士論文執筆中。専門は比較文化分野。日本、中国、台湾を中心に東アジアの近代茶文化を研究する。論文: 「日台現代茶文化比較研究」 2008年度筑波大学大学院地域研究科修士論文。



アミーラ サイド アリー ユーセフ **Amira SAID Aly Youssef**

大学院生。博士論文執筆中。専門: 近代日本文学(宮沢賢治の児童文学における「子供像」の展開)
(エジプト投資・フリーゾーン局 研究者・翻訳者)



酒井たか子 **SAKAI, Takako**

専門は日本語教育学、特に外国人学習者の日本語能力の評価、聴解教育。「中規模テストとしてのプレースメントテスト再考」(藤原雅憲ほか編『大学における日本語教育の構築と展開』ひつじ書房) など。



楊 元 **YANG, Yuan**

大学院生。博士論文執筆中。研究分野は外国人学習者の日本語能力評価と測定(特に聴解能力)。「JLPT 聴解問題における国内受験者と国外受験者の困難度の差について」東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文など。

編 集 後 記

第二号が出た。たいへんな波と風に見舞われ、沈没しそうなときもあったが、やっと入港できた。

今回の紀要では、大小さまざまな変革が行われた。

いちばん大きな変革は、大学院生から寄稿論文を募ったこと。創刊号では、教員の寄稿だけだったが、今回は博士論文を執筆中の学生たちも、ふるって応募した。学生たちはいま歩んでいる軌跡を、すこしでも形にしたい、と張り切っていた。ところが、査読者の目はなかなか厳しく、最終的に残った学生論文は四篇だけだった。それも、「研究論文」ではなく、「研究ノート」というカテゴリーでの掲載となったのである。ノートは、論文としての完成度よりも、何か光るものをもっていることに重点がおかれる。論文になる前の萌芽的な段階、といってもいい。論文として掲載されなかったことは、残念といえば残念であろう。しかし、長年（なかには三十年も四十年も）論文を書きつづけてきた教員と同じ土俵にのぼって、同じ審査を受けようとする学生の熱意に、むしろ拍手を送りたい。

学生参加の試みは、まだはじまったばかりである。今後も、紀要に論文を掲載するという目標に挑みながら、博士論文を完成して行ってほしい。

教員の掲載論文は、創刊号とほぼおなじ五篇となった。ひとつの分野に偏ることなく、異なる複数の分野から出た論文群であり、国際日本研究専攻がその特徴として誇る「多様性」を、みごとに凝縮した形となった。

編集委員たちの任期は、二年間。今回の発行をもって、これまでの紀要編集委員会は解散となる。何もないところから、今あるような紀要をうみだす努力をした編集委員たちに、ねぎらいの言葉を送りたい。（編集後記を書いているわたし自身にも。）

よい仕事ができただろうか、不安は残るが、紀要を独自なものとする

ために、工夫したことがある。それは、21世紀の今日にアピールできる紀要とするため、ヴィジュアルな要素を強調することだった。論文に図や表や写真の引用を奨励した。提出された原画がカラーの場合は、カラー印刷するように心がけた。創刊号では、そのヴィジュアル性はまだ十分に見られなかったが、今回の号ではずいぶん定着したと思う。

紀要の表紙の作成にも、時間がかけられた。創刊号では赤色の濃淡のグラデーション。そして今回の第二号では、赤色から青色へのグラデーションが、じっと見つめる目に不思議な動きの感覚を引き起こす。未来の第三号では、また別の色へのグラデーションが起こるはずである。こうして、表紙はたえず動き、成長していく。ちょうど、紀要そのものが成長していくように。

『国際日本研究』編集委員長

今泉 容子